

特集

# 「いわて若者文化祭」

動きだす若者たちをバックアップ！



今月15日(土)・16(日)に開催される「いわて若者文化祭」。文化芸術の持つ創造性と若者の活力を融合させる、県・実行委員会として初の取り組みであり、若者たち自身も日頃から励む活動発表の場として期待を寄せています。

「いわて若者文化祭」とは？

メディアコンテンツ、伝統芸能・伝統工芸、食、デザイン、ストーリーパフォーマンスなど幅広いジャンルから集まる若者たちが、その活動を発表する場「いわて若者文化祭」。若者たちが企画するイベントは数多くありますが、行政が若者の芸術文化活動をバックアップする例は全国でも珍しく、岩手県若者女性協働推進室文化振興担当課長・吉田真二さんは同文化祭開催の背景や意義について、こう話します。

「本事業立ち上げの根底には、本格復興の推進に取り組む本県において、文化芸術分野でも多くの若者が活躍していることがあります。あまり公に取り上げられない若者文化にもスポットを当て多くの方に観てもらうことは、若者たちの自信や励みになるはず。そして、岩手が面白いと思えることが郷土への愛着につながっていくと考えています」。

その目標は次の3点。  
1、次世代を担う若者に、日頃培つ



同事業は今後も継続実施を検討中。「今回の結果や反響を踏まえながら、今後の方向性を詰めていきたい」と吉田さん



運営スタッフが常駐するカフェ「KAKERU」では、同文化祭のイベントも開催予定。「文化祭を機に若者たちがどんなアクションを起こすかも楽しみ」と伊藤さん

た文化芸術の発表の場を提供するとともに、文化活動を通じた交流の場を創出すること。  
2、復興と今後の岩手の未来に向け、若者による文化活動がさらに活発になることにより、日々の生活に潤いが生まれるなど生活の質や地域の魅力が向上する。  
3、県全体の文化芸術の新たな魅力を高め、県の情報発信力を強化する。

### 幅広い活動の掘り起し

今年5月に、市長会、町村会、大学、専修学校各種学校連合会などのメンバーで実行委員会を立ち上げ、大学生やNPO、クリエイターなどによる企画部会が3つの目標に従っ

た活動展開案を話し合ってきました。7月には開催準備等の業務を民間企業に委託し、情報共有をしながら具体的な募集告知や運営の準備段階へ。現在は出演・出典者が確定し、当日の舞台準備や広報に一層力を入れています。

「実は私たち自身、若者文化っていったいどういうものなのか？わからない面もありました。応募いただいたことで初めて知った活動もあり、視野が広がりました」。

例えば、出演部門では、ロックバンド、ダンスグループ、アカペラグループ、コンサートでの応援芸から発展させたオタ芸なども。展示部門では、マンガによる気仙地域の魅力紹介、自主制作映画、自主開発したスマホアプリなど実にバラエティに富んだ企画が集まりました。完成度の高さだけでなく、多彩な若者の活動を掘り起こすことも初回の目的の一つと吉田さんは話します。

### 若者と同じ目線で企画運営

同文化祭の運営を担当する会社の伊藤大介さんは、首都圏で十数年を過ごした後、震災の復興支援を機に岩手に移り住んだのですが、地元の若い世代と関わるなかで感じた思いがあるといいます。

「岩手の人たちは個々の考え方や活動を強く主張せず、そのエネルギーを静かに内に溜めている人が多くのように感じます。外に対して発信

する機会が少ないのかもしれない。私自身、岩手で暮らしてここが好きになった一人なので、地元で活動をしている若い世代が少しでも輝ける場を提供できたら、との思いでこの企画に関わっています。一人で何かを発信するのは勇気が入りますが、皆で一緒に発信して盛り上がることでできた一番です」。

県が中心となって行う事業であることに捉われず、「やりたいこと」「おもしろいこと」を大事に企画提案したと伊藤さん。行政が主導する同文化祭は対外的なインパクトもあり、若者たち個々の活動とは違ったアプローチができると期待しています。現在は、出演者のステイジづくりや当日の会場準備に向けて忙しさが加速中ですが、各出演者どうしをコラボさせたステイジづくりを進めるなど、運営サイドがつなぎ手となった新たなパフォーマンズの創出にも取り組んでいます。

### 誰のための文化祭？

ところで、この「いわて若者文化祭」は果たして若者だけに向けた企画でしょうか。地域、街、ビジネスの現場において、若い世代の発想やエネルギーはいつの時代も大きな原動力。今を生きる若者たちが何に興味を持ち、何を表現したいのかわかる機会として、この文化祭は事業者にとっても貴重な場といえます。「若い世代が目上の世代と接する

時って、多少なりとも皆萎縮するもの。こうした表現の場は、学校や社会生活で少し緊張した自分を解放できる場でもあります。例えば家族に同世代のお子さんがいる、あるいは会社と同世代の部下がいる方々にも見ていただくことで、世代間の見方や距離を縮める手助けになるのではないかと思います」。

伊藤さんがそう話す一方で、吉田さんもこんな捉え方をしています。「普段は水面下にある若者たちの活動を、あえて街なかの『おでつて』や『ななつく』など多くの人が交流する場で開催することに意味があります。『若い世代はこんなパワーや発想を持っているのか』と新しい発見があり、面白い人材を発掘する可能性もあります」。

第1回目は「まずはやってみる」とが大事。その着地点の姿を主催者側もあえて明確に描いてはいけません。今の時代に定着している文化も、はじまりは突拍子もない芽から拡がり育ったもの。その種である若者たちがどう成熟されていくかはわかりませんが、伊藤さんの話すように、内に向けていたエネルギーを外に向けて発する勇気を、周囲もしっかりと受け止めていくこと。そのことが岩手の明日を大きく変えるきっかけになるかもしれません。若者文化って何だろう。一步構えて俯瞰する世代も、ぜひ足を運んでみてはいかがでしょうか。